

古期英語詩『ベーオウルフ』のGeatas

IWAYA, Michio / 岩谷, 道夫

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学キャリアデザイン学部紀要 / 法政大学キャリアデザイン学部紀要

(巻 / Volume)

13

(開始ページ / Start Page)

25

(終了ページ / End Page)

42

(発行年 / Year)

2016-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012779>

古期英語詩『ベオウルフ』のGeatas

法政大学キャリアデザイン学部 教授 岩谷 道夫

1.

Beowulf⁽¹⁾『ベオウルフ』は、古期英語で書かれたおよそ3000行からなる物語詩である。17世紀に、1000年頃に書かれたと考えられる写本が発見された。原作者は不明で、その成立時期については、7世紀から11世紀までの間の様々な説があり、8世紀の前半に成立したとする説が有力とされているが、確かなところはわからない。

主人公Beowulfベオウルフの祖国は、Geatasイェーアタスという国家であり、Geatasは、『ベオウルフ』の中で、Deneデネという国家の友邦国家とされている。デネというのは、今日のデンマークで、実在の国家である。一方、Geatasは、以前は架空の国家と考えられていた。ベオウルフは、怪獣や龍を退治する超人的な力を持った架空の人物であり、その祖国Geatasも、実在の国家ではないと考えられていたのである。

もっとも、『ベオウルフ』には、Geatas、Deneの他に、Fresanフレーザン（フリージア）、Francaフランク（フランク）、Sweonスウェーオン（スウェーデン）等の国家が言及されていて、その多くは実在の国家である。また、登場人物も、デネの国王Hrothgarフロースガール、アングルのOffaオッフア王、等、実在した人物が言及されている。そこで、『ベオウルフ』は、実在の人物、国家が登場するが、Geatasに関しては、虚構と考えられていたのである。

ところが、19世紀の前半に、デンマークのGrundtvig グルントヴィーによっ

て、『ベオウルフ』にGeatasの国王として登場するHygelacヒエラークが、歴史的に実在した人物であることが明らかにされた⁽²⁾。その結果、Geatasも実在の国家と考えられるようになり、様々な説が提示された。主な説は二つで、一つはスカンジナビア半島のガウタルという国家であるとする説、もう一つはユトランド半島のジュートの国家であるとする説である。19世紀の前半から、その二つの説の論争が、半世紀以上続いた。今日では、その二つの説のうち、前者が有力とされているが、第三の説も登場している。

本稿は、『ベオウルフ』のGeatasについて、様々な説について、とりわけジュート説の論拠となったベーダのアルフレッド大王による古期英語訳⁽³⁾を通して考え、また、*Beowulf*の研究史において極めて重要なFr. Klaeberクレバーの第3版の見解、そしてクレバーの第3版を改訂編纂した*Klaeber's Beowulf 4th.Ed.*の編集者達の見解を検討して、Geatasの実体を考えたいと思う。

2.

『ベオウルフ』のGeatasについて、前述のように、19世紀から20世紀前半にかけて、ユトランド半島のJutesジュートの国とする説と、スカンジナビア半島南部の古期ノルド語でGautarガウタルという国家とする説に分かれて、論争が続けられて来た。その論争史は、J. A. Leakeリークによれば、次のようなものだった⁽⁴⁾。

6世紀のトゥールのグレゴリウスの『歴史』⁽⁵⁾の中に、Chlochilaichusクロキライクスという人物のフランク王国への侵入の記述があり、そのクロキライクスが、デンマークのグルントヴィーによって、『ベオウルフ』のGeatasの国王ヒエラークと同一人物であるという主張がなされたのが、論争の出発点である。グルントヴィーの説は、ラテン語と西ゲルマン語の一つである古期英語の間の音韻対応を通して明らかにされたもので、それまで歴史的事実とは必ずしも関連付けて論じられて来なかった『ベオウルフ』のGeatasが、実在の国家として見做される契機になったのである。もっとも、トゥールのグレゴリウスは、クロキライクスの侵入を、Daniデーン人によるものと記していて、Geatasと関連したラテン語の表記で記しているわけではない。ただ、『アングロ・サクソン年代記』⁽⁶⁾が、8～9世紀の北方人のブリテン島への侵入を、す

べてDeneデーン人によるものとしていたように（実際はデンマークとノルウェーの両方からの侵入があったのであるが）、トゥールのグレゴリウスにおけるDaniも、必ずしもデーン人を意味するのではないと解された。それゆえ、GeatasがDeneの友邦国家で、クロキライクスがGeatasの国王ヒエラークHygelacであれば、Geatasは、Dene以外の北ヨーロッパの別の国家であると考えられたのである。

その後、Geatasを北ヨーロッパの实在の国家と同定する様々な試みがなされたが、文献上明らかにするのは困難で、結局、古期アイスランド語のエッダやサガ等に見出される二つの言葉、GautarとIotarに、Geatasの同定が求められた。英語では、前者は、the Geats（古期英語ではGeatas）、そして後者はthe Jutesの意味である。Gautarとは、スカンジナビア半島南部の国家で、Iotarは、ユトランド半島のジュートの国家であり、その二つのいずれをGeatasと考えるかで、論争が続けられて来たのである。簡潔に言えば、ガウタル説とジュート説の論争である。

ガウタル説は、古期アイスランド語のGautarと古期英語のGeatasの音韻対応を論拠とし、また、ジュート説は、様々な観点から展開されたが、その一つの有力な論拠になったのが、ベータ『英国教会史』のアルフレッド大王による古期英語訳のGeatasであった。ジュート説は、ベータがIutaeすなわちジュートとして言及していたゲルマン人が、アルフレッドの古期英語訳ではGeatasと訳されていたので、それをもとに、同じ表記の『ベオウルフ』のGeatasも、ジュートであるとしたのである。その二つの説は、主に、ジュート説のアルフレッド大王による古期英語訳のGeatasをめぐる論争が展開された。双方の主張が続いたが、ガウタル説が優勢で、20世紀の前半にはほぼその論争は、完全にではないが、暫定的な収束を見た。論争の当事者で、ガウタル説のR.W. Chambersチェインバーズは、その具体的な論争の内容の一部を自著で紹介している⁽⁷⁾。筆者は、ガウタル説を支持しているが、その理由は、音韻対応によるものではない。それについては、後段で触れることにしたい。

3.

それでは、二つの説の論争の中心になったベータの『英国教会史』のアル

フレッド大王による古期英語訳について検討することにしたい。まず、ラテン語によるベーダの原著『英国民教会史』の当該箇所を見てみたい。それは、ブリテン島に渡って来たアングル、サクソン、ジュートの大陸の故地と新たなブリテン島の定住地に関する次のような記述である⁽⁸⁾。

Aduenerant autem de tribus Germaniae populis fortioribus, id est Saxonibus, Anglis, Iutis. De Iutarum origine sunt Cantuarii et Uictuarii, hoc est ea gens, quae Uectam tenet insulam, et ea, quae usque hodie in prouincia Occidentalium Saxonum Iutarum natio nominantur, postea contra ipsam insulam Uectam. De Saxonibus, id est ea regione, quae nunc Antiquorum Saxonum cognominatur, uenere Orientalis Saxones, Meridiani Saxones, Occidui Saxones. Porro de Anglis, hoc est de illa patria, quae Angulus dicitur, et ab eo tempore usque hodie manere desertus inter prouincias Iutarum et Saxonum perhibetur, Orientales Angli, Mediterraneus Angli, Merce, tota Nordanhymbrorum progenies, id est illarum gentium, quae ad Boream Humbri fluminis inhabitant, ceterique Anglorum populi sunt orti.

さて、彼らはゲルマニアの有力な三つの部族、即ちサクソン、アングル、ジュートの地より来たのであった。ケントの人々（カントゥワーリー）、およびワイト島の人々（ウィクトゥアリー）、即ち、ワイト島を保持している人々と、ワイト島の対岸にあって、今日までウェスト・サクソンの地でジュートと呼ばれている人々は、ジュート起源である。サクソン、即ち現在、古サクソンと呼ばれている人々の地域からは、イースト・サクソン、サウス・サクソン、ウェスト・サクソンの人々が来ている。アングル、即ち、アンゲルンと呼ばれ、ジュートとサクソンの間にあって、その頃から今日に至るまで、ほとんど無人の状態のままと言われている地域からは、イースト・アングリア、内陸のアングル、マーシア、そしてすべてのノーサンブリアの人々が、即ち、ハンバー川の北に住んでいる人々と、その他のアングルが来ている。

ベアダは、上の引用部分で、ジュートの表記について、四箇所言及している。Iutisという表記が一箇所（2行目）、Iutarumが三箇所（2行目、3行目、8行目）である。Iutis、Iutarumは、それぞれ複数与格、複数属格である。複数主格は用いられていないが、用いられていたとすればIutaeである。次が、アルフレッド大王による古期英語訳である⁽⁹⁾。

Comon hi of þrim folcum ðam strangestan Germanie, þæt of Seaxum ond of Angle ond of Geatum. Of Geata fruman syndon Cantware, ond Wihtsætan; þæt is seo ðeod þe Wiht þæt ealond oneardað. Of Seaxum, þæt is of ðam lande þe mon hateð Ealdseaxan, coman Eastseaxan ond Suðseaxan ond Westseaxan, And of Engle coman Eastengle ond Middelengle ond Myrce ond eall Norðhembra cynn; is þæt land ðe Angulus is nemned, betwyh Geatum ond Seaxum; is sæd of þære tide þe hi ðanon gewiton oð to dæge, þæt hit wesye wunige.

上の古期英語訳では、ベアダのジュートの表記に対して、IutisについてはGeatum（複数与格）、そしてIutarumについてはGeata（複数属格）という表記になっている。アルフレッドによる古期英語訳は、逐語訳ではないので、ベアダで三箇所用いられていた複数属格のIutarumに対して、複数属格のGeataが用いられているのは、二箇所だけである。また、ベアダの原文にも複数主格は用いられていないが、古期英語の複数主格が用いられていたとすれば、Geatasである。その表記が、『ベアオウルフ』のGeatasと同じ表記であることから、それがジュート説の論拠となったのである。

ところで、アルフレッド大王の時に始められた古期英語による『アングロ・サクソン年代記』にも、次のように、ブリテン島に渡って来たアングル、サクソン、ジュートについての記述が見出される⁽¹⁰⁾。

Ða comon þa men of þrim mægðum Germanie. Of Ald Seaxum. of Anglum. of Iotum. Of Iotum comon Cantware ond Wihtware. Þet is seo mægð þe nu eardap on Wiht. ond þet cyn on West Sexum þe man nu git hæst Iutna

cynn. Of Eald Seaxum coman East Seaxa. ond Suð Sexa. ond West Sexa.
Of Angle comon se a syððan stod westig. be twix Iutum ond Seaxum. East
Angla, Middel Angla. Mearca. ond ealla Norphymbbra.

ジュートについての表記は、Iutum（1行目、2行目、4行目：複数与格）、Iutna（3行目：複数属格）となっている。『アングロ・サクソン年代記』の記述は、ベーダの『英国民教会史』をもとに書かれたもので、Iutum、Iutnaがベーダの解釈に基づいた表記になっている。

それでは、アルフレッド大王による古期英語訳のGeatasで、なぜベーダのIutaeすなわちジュートが、『アングロ・サクソン年代記』とは異なり、Geatasと訳されたのであろうか。

アルフレッド大王によるベーダの古期英語訳におけるGeatasについては、20世紀の前半まで、その表記を、古期英語の写本の写字生による誤記とするものと解釈され、特に異論は提示されてこなかった。20世紀の前半に、チェインバーズが、写字生による誤記ではなく、翻訳者の誤記によるという説を提示し、それ以後、その説が有力とされている。

チェインバーズは、次のように述べている。すなわち、アルフレッド大王によるベーダの古期英語訳におけるGeatasは、写字生による誤記ではなく、翻訳者の誤りである；その根拠として、ラテン語で書かれたEthelwerdエゼルウェルドの『年代記』⁽¹¹⁾が挙げられる；そのエゼルウェルドの『年代記』は、ベーダのアルフレッド古期英語訳以前のもので、ラテン語で、ベーダの複数与格IutisをGiotisと表記し、また複数主格のIutaeについてはGiotiと表記していた；アルフレッド大王の古期英語訳は、そのエゼルウェルドの表記に影響されて、Iutisについて、本来であればEotumとすべきところを、Geatumとし、またIutarumについては、EotaとすべきところをGeataにしたのである、と⁽¹²⁾。

ところで、20世紀後半に、そのチェインバーズの説に対して、リークにより新たな説が提示された⁽¹³⁾。リークは、チェインバーズが、その箇所を写字生の誤りとはしない点に賛意を示している。しかしながらリークは、チェインバーズの、それを翻訳者の誤りであるとする点については、次のように批判する⁽¹⁴⁾。

すなわち、チェインバーズは、アルフレッド大王による古期英語訳は、ベアダの原典だけでなく、エゼルウェルドの『年代記』を参照し、その『年代記』の表記に影響されて、Geatum、Geataと誤って訳したと考えたが、当該箇所はGeatasは、古期英語の翻訳者が、ジュートがもともとGeatasであるという考え方に基づいて翻訳した；そして、その考え方が、当時一般的に広く普及しているからこそ、そのGeatasという表記を用いたとするのである、と。エゼルベルトの影響で誤訳したわけではなく、むしろ当時としては、正しい表記と考えていたと述べる。

リークは、さらに、ベアダの『英国民教会史』の中で、もう一箇所、別の章でジュートが言及されている部分⁽¹⁵⁾についての、アルフレッド訳に触れている⁽¹⁶⁾。つまり、そこでは、ジュートについて、前述の古期英語訳GeataおよびGeatumとは異なり、Eota、Ytenalになっていて、翻訳者はジュートについて敢えて二通りの訳し方をしたとする。つまり、EotaおよびYtenalは、ベアダの時代のジュートを表わす表記であり、GeataおよびGeatumは、ジュートの起源的民族の呼称であるとするのである。古期英語の翻訳者は、ジュートの大陸時代に関する箇所についてのみ、GeataおよびGeatumと訳したと考えるのである。その点がリークの斬新な観点であり、Geatasは、西洋全般で広く行き渡っていたGetaeという伝説的な古い民族で、ジュートもゴートも、その民族の別称であるとするのである。

ところで、12世紀のWilliam of Malmesburyウィリアム・オヴ・マームズベリーも、ラテン語で書かれた*Gesta regum Anglorum*の中で、ベアダの『英国民教会史』に依拠して、アングル、サクソン、ジュートについて言及している。ジュートについての言及は二箇所、i. 5.1ではIutis、i. 5.3ではIutaeとなっている⁽¹⁷⁾。リークは、ウィリアム・オヴ・マームズベリーも、ジュートをゴートと考えているとして、次のように述べている⁽¹⁸⁾。すなわち、ウィリアム・オヴ・マームズベリーの*Gesta regum Anglorum*のii. 116に、「Slaswicを含む地域が、Anglia Vetus (Old Anglia) と呼ばれていて、そこからアングルがブリテン島に渡った。その地域はSaxonesとGothonesの間にある。」という記述が見出される、と。リークは、ウィリアム・オヴ・マームズベリーも、ベアダのアルフレッド古期英語訳と同じように、ジュートについて、二通りの把握

をしていて、ジュートについて起源的な記述をする場合には、ゴートと述べていたと指摘するのである。確かに、リークの述べるように、中世初期および中期の西洋世界において、伝説の民族Getaeについての伝承が広く行き渡り、それが、中世の様々な文献に残り、あるいは、ベーダの『英国民教会史』のアルフレッド大王の古期英語訳に、あるいは、ウィリアム・オヴ・マームズベリーに、そしてアルフレッド大王の古期英語訳に、その反映が見出されると言えるかも知れない。リークが、『ベオウルフ』のアルフレッド大王の古期英語訳のGeatas、そしてウィリアム・オヴ・マームズベリー他、数多くの文献を通して、通説とは全く異なる立場で、Geatasについて、Getaeという観点から追究した点は、称賛に値すると言えよう。ただ、リークの述べるGetae、すなわち、ジュートもゴートも含まれるその伝説的民族によって、『ベオウルフ』のGeatasも説明され得るかどうかは、また別の問題である⁽¹⁹⁾。

筆者は、『ベオウルフ』のアルフレッド大王の古期英語訳のGeatasについて、チェインバーズの説およびリークの説に対して、見解を確言するのは困難という立場である。あるいは、旧来の説である写字生による誤記の可能性もあり得ると考える。むしろ、『ベオウルフ』におけるGeatasの表記に影響されて、そのような誤記をした可能性も否定できない。ただ、ベーダの『英国民教会史』のアルフレッド大王の古期英語訳のGeatasが、どのような理由でGeatasという表記になったにせよ、その古期英語訳のGeatasは、決してジュート説の主張する論拠にはなり得ないと考える。『ベオウルフ』の「フィン王の挿話」に登場するEotanすなわちジュートが、ジュート説の成立を困難にするからである。それについては、結語のところで、再び触れることにしたい。

4.

ところで、ここで、*Beowulf* の編纂において重要な足跡を残したクレーバーの*Beowulf and the Fight at Finnsburg* 第3版の見解と、そのクレーバーの第3版を改訂して、*Klaeber's Beowulf, 4th ed.* という書名で、*Beowulf* の編纂書を著わした編集者達の見解を検討したい⁽²⁰⁾。後者の編纂書は、クレーバーによる第3版を受け継ぐ形で、*Klaeber's Beowulf, 4th ed.* と名付けられているが、実際には、「Introductionにおいても、Commentaryにおいても、時折、新たな文章が

クレーバーの文章の次に、あるいはクレーバーの文章の間に付加されている場合があり、あるいはクレーバーの文章が削除されたうえで、新たな文章が付加されている場合もある。その場合、どこまでが3rd Ed.のクレーバーの見解か、どこからが4th Ed.の編者達による新たな見解であるかが、4th Ed.のみに触れた読者には把握が困難になる」⁽²¹⁾。それゆえ、本稿の*Beowulf* におけるGeatasについて考える際も、クレーバー自身の第3版との関連で*Klaeber's Beowulf, 4th ed.*を論じる場合には、両者を比較検討するという手続きが必要にならざるを得ないであろう。

まず第3版のクレーバー自身のGeatasについての見解を見ることにしたい。クレーバーの見解は、第3版のIntroductionのThe Nationality of Geatsの項に見出される⁽²²⁾。

クレーバーは、まず、19世紀以来、Geatasについて提示されて来たいくつかの説を挙げ、結局、Geatasは、ユトランド半島北部のジュートとスウェーデンの南方のガウタルの二つに絞られると述べる。そのうえで、クレーバーは、GeatasとGautarの音韻対応に触れ、GeatasをGautarとする説について、音韻対応については疑いの余地はないとしている。一方、地理的および歴史的な証拠については、二つの説のいずれも明らかなものはないとする。次に、クレーバーは『ベオウルフ』の中の、特に後半の、GeatasとSweonスウェーデンの対立について言及している。そして、次のように述べる⁽²³⁾。

It would be difficult, on the other hand, why the Jutes and the Swedes should persist in warring upon each other in such inveterate fashion.

つまり、ジュートとスウェーデンが恒常的に戦いの状態にあった理由を見出すのが困難ということであろう。音韻対応だけでなく、そのようなスウェーデンとの対立という観点から、クレーバーは、ガウタル説を支持するのである。

確かに、クレーバーの述べるように、ユトランド半島にいたジュートに対して、当時、スウェーデンは、スカンジナビア半島の中部から北部の国家であり、ジュートとスウェーデンとの間の対立は現実的ではない。従って、GeatasとSweonの対立は、スカンジナビア半島においてであり、Geatasは、ユトラン

ドのジュートではなくスカンジナビアのGautarと考えるのが自然であろう。一方、『ベオウルフ』の時代が6世紀の前半であるとすれば、その時ジュートは、すでにユトランドを離れ、フリージアンの近くに移動し、そして一部はブリテン島へ移住し、また一部はフリージアンと融合していたものと推測される。そうであれば、ジュートの国家は、ユトランドにおいては存在しておらず、そのジュートが、Geatasという国家としてスウェーデンと対立していたというのは、なおさら想像が困難になるであろう。

それでは次に、クレーバーの第3版を改訂して、*Klaeber's Beowulf, 4th ed.* という書名で、*Beowulf*の編纂書を著わした編集者達の見解を見ることにしたい。*Klaeber's Beowulf, 4th ed.*では、Geatasについて、IntroductionのThe Homeland of GEATASという項で述べられている⁽²⁴⁾。

前述のように、*Klaeber's Beowulf, 4th ed.*の特徴は、クレーバーの第3版の文章をもとに、ある場合には、それを残し、ある場合には、それを削除もしくは加筆して新しい見解を展開するという方法をとっている点である。Geatasについての見解についても、そのような方法で述べられている。順を追って見てみたい。

まず、第一段落では、This～literaryの文章は、表現を変えた箇所と加筆した箇所があるが、基本的にクレーバーの構文を踏襲し、内容は、ほぼ同じである。次のThe name～historyまでは、クレーバーのGrundtvigからNorth Englandまでの3行ほどの文章を削除し、そこに11行ほどの新しい文章を付加し、クレーバーのBut the only peoplesからの文章に文脈をつなげている。Geatasの場所についての諸説を6つに分け、クレーバーよりも少し詳しい内容になっている。その6つの分類は、後ほど触れることにしたい。The argument～Gothsまでのいくつかの文章については、6行ほどが、新しく付加された文章になっている。その文章は、リークについての言及で、やはり後ほど触れたいと思う。

第二段落では、Phonetically～doubtまでのいくつかの文章で、表現は少し変えてあるが、クレーバーの第二段落の文章とほぼ同じ文章で、従って内容もほぼ同じである。

第三段落のTestimony～obscurityは、部分的に表現を変えてあるが、構文

は、クレーバーの文章を踏襲している。内容もほぼ同じである。The poem～Swedenは、クレーバーのIt is clear～の文章を少し変え、新たな付加された文章もあるが、内容はクレーバーの文章に近い。Hygelac's～simplicityでは、前半はクレーバーの文章と近いが、後半に新しい文章を加えている。しかし内容的には、あまり変わっていない。The dragon～whale's headlandについては、the dragonからの文章が、クレーバーでは、前の文章に続いているが、別の文章として始めている。Whale's headlandに関連する部分は、ほとんどクレーバーの文章と同じだが、語順が変えてある。内容は同じである。The contact～an inland lakeは、クレーバーの文章と近い文章で、内容もほとんど同じ。These details～the landing pointまでのいくつかの文章の12行ほどの文章は、クレーバーにはない、新たに付加された文章。SwedenとGeatasの関係から、Geatasが、the Jutes, the Danes等であるとする説を紹介している。また、クレーバーが、第一段落の二つ目の文章で紹介しているGrundtvigのBeowulfがGotlandから来たという説に触れている。新しく付加された文章ではあるが、内容的には、4th ed.で削除されたクレーバーの第一段落の文章に近い。

第四段落では、Yet possibly～Västergötlandは、クレーバーの数行の文章を削除して付加した新たな文章である。ただクレーバーの見解に近い。In addition～Vätterについては、the water route～Vätterまでは、クレーバーの文章と同じである。もっともその文章の前の文章は全く異なるが。Even～landは、クレーバーの文章とほぼ同じである。

第五段落では、In the end～sceneryまでのいくつかの文章が、クレーバーの文章に近い文章。Even～realは、クレーバーの文章と似た文章である。Thus～denotesは、クレーバーにはない新しい文章だが、クレーバーの見解に近い。The weight～Gautarは、最後の文章で、総括的な内容である。クレーバーの文章の最後の方の文章に近い。もっともその前のクレーバーの30行ほどの文章が削除されている。その削除された文章の中に、Sweon とGeatasの関係についての、前に触れたクレーバーの見解が述べられた文章が含まれている。大変重要な文章であり、削除する必要性は感じられない。

以上、*Klaeber's Beowulf, 4th ed.* のクレーバーの第3版との異同について見て来たが、総じて、Geatasに関しては、4th ed.の編集者達の見解はクレーバーに

近い。ただ、いくつか付加された新しい点があり、それを見ることにする。

まず、第一段落の二つ目の文章の中の、Geatasの場所についての諸説についてであるが、*4th ed.*では、次のように6つに分類されている。すなわち、(1) northern England、(2) Angeln, including Schleswig、(3) the island of Öland off the southeast coast of Sweden、(4) Gotland, north of Öland、(5) the peninsula of Jutland in Denmark、(6) Väster-and Östergötland, south of the great Swedish lakes である。ただ、その文章の次に、クレーバーのBut the only peoplesからの文章をつなげて、(5) と (6) の二つが有力と述べている。(5) はジュート説で、(6) はガウタル説である。そこではそのどちらがGeatasであるかについては触れていないが、結論は、最終部分の文章で、ガウタル説に賛同となっている。

また、第一段落の三つ目の文章で、リークの説が紹介されている。またその説に関連して、編集者の一人のNilesナイルズにも言及されている。リークの説は、前述のように、Geatasが実在の国家もしくは民族ではなく、ラテン語でGetaeと表記された伝説上の民族の古期英語表記とする説であるが、それに対する批判的な見解に触れられている。その批判については、別に論じたい。

5.

これまで、『ベオウルフ』のGeatasについて、論争史を概観し、また、ベータ『英国国教会史』のアルフレッド大王の古期英語訳のGeatasの意味を確認した。そして、クレーバーによる*Beowulf*の3th ed.と*Klaeber's Beowulf 4th. ed.*の、それぞれのGeatasについての見解を見て来た。

まず、Geatasについての論争史であるが、スカンジナビア半島のガウタル説と、ユトランド半島のジュート説に分かれ、前者はGeatasとGautarの音韻対応を論拠にし、後者はベータ『英国国教会史』のアルフレッド大王の古期英語訳のGeatasを論拠とした。音韻対応については明らかであるので、問題は、ベータ『英国国教会史』のアルフレッド大王の古期英語訳のGeatasとは何かということになった。20世紀前半までは、写字生の誤記とする説が通説であったが、チェインバーズが、翻訳者がジュートをGeatasと誤って記したとして、それ以後それがほぼ定説になっている。ただ、それに対して、リークは、その当

時の認識としては、ジュートをGeatasとするのは、広く行き渡った考えであり、当時は、ジュート＝ゴートであり、いずれもラテン語でGetaeと呼ばれる伝説の民族に起源を持つとした。そこで、実際に、ベータの原文、ベータ『英国民教会史』のアルフレッド大王の古期英語訳を確認し、また『アングロ・サクソン年代記』の関連箇所も参照し、チェーンバーズとリークの説を検討した。

次に、クレーバーによる*Beowulf*の3th ed.と*Klaeber's Beowulf 4th.ed.*の、それぞれのGeatasについての見解を確認した。*Klaeber's Beowulf 4th.ed.*は、クレーバーの文章について、削除および加筆がしばしば見られるが、Geatasについては、クレーバーの見解を踏襲し、ガウタル説をとっている。もっとも、クレーバーの文章の中の、GeatasとSweonの関係についての文章が削除されている点は残念であるが。

結局、『ベオウルフ』のGeatasについては、ガウタル説が有力であろう。音韻対応からも、またクレーバーの指摘するGeatasとSweonの関係からも、そのように結論付けられるであろう。ただ、『ベオウルフ』のGeatasがジュートではないと明らかに出来る方法が、他に一つ考えられる。それは、『ベオウルフ』の「フィン王の挿話」のEotanエーオタン（ジュート）の存在である。「フィン王の挿話」は、GeatasからDeneに来て、怪獣グレンデルを退治したベオウルフに対する祝宴の中で、ベオウルフに語られる物語である。それは、デネのHengestヘンジェストが、フリージアンとジュートを倒すという内容で、デネにもベオウルフと同じような英雄がいたとして、GeatasとDeneの双方の英雄を讃える設定になっている。「フィン王の挿話」では、ジュートは、悪の役割を付与されている。その場合に、もしGeatasがジュートであったならば、Geatasから来たベオウルフを讃える物語としては、不都合な内容となるであろう。デネの国王フロースガールは、デネにもGeatasのベオウルフのような英雄がいて、ジュートを倒したという物語を通して、ベオウルフを讃えようとしたのであるが、その物語の中で悪の役割を付与されているジュートがGeatasであったとしたならば、ベオウルフに対する礼を失したことになり、基本的にその祝宴は意義を失う状況になるであろう。つまり、Geatasは、決してジュートではなく、デネの向こうのスカンジナビアの国で

あったと考えざるを得ないのである⁽²⁵⁾。

[注]

- (1) 本稿では*Beowulf*について、基本的に次の刊本に基づいて論じることにする。*Beowulf and the Fight at Finnsburg*, ed. Fr.Klaeber, 3rd ed., D. C. Heath and Company, Lexington, Massachusetts, 1950.
一方で、次の刊本に基づいて論じる場合もある。
Klaeber's Beowulf, 4th ed., eds. R. D. Fulk, R. E. Bjork, J. D. Niles, Toronto, Toronto University Press, 2008.
- (2) Grundtvig, N. F. S., *Biowulfs Drape*, København, 1820. Cf. Earl. J., *The Deeds of Beowulf*, Oxford, at the Clarendon Press, 1892, Introduction.
- (3) *The Old English Version of Bede's Ecclesiastical History of the English People*, ed. Thomas Miller, *E.E.T.S.*, nos.95-96, I – X II, 1890.
- (4) Leake, J. A., *The Geats in Beowulf*, Madison, Milwaukee and London, the University of Wisconsin Press, 1967, pp.4-5.
- (5) *Gregori Episcopi Turonensis historiarum libri X*, in *M. G. H., Scriptores rerum Merovingicarum*, Tom. 1, ed. Wilhelm Arndt, Hannover, 1885. 邦訳：
『トゥールのグレゴリウス 歴史十卷（フランク史）I』、兼岩正夫、臺幸夫訳註、東海大学出版会、1975年、第3巻、3。
- (6) *Two of the Saxon Chronicles Parallel*, ed. John Earle and revised by Charles Plummer, 2 vols, Oxford, 1892-99; vol. I, p.13 (The Laud Ms.).
当該箇所は、The Parker Ms. (*The Winchester Chronicle*) のp.12とThe Laud Ms. (*The Peterborough Chronicle*) のp.13の両方に記録されている。少しだけ綴りの異同があり、ここでは比較的新しい12世紀前半に書かれたThe Laud Ms.のほうを引用した。
- (7) Chambers, R. W., *Beowulf—an Introduction to the Study of the Poem*, 3rd ed., Cambridge University Press, 1959, pp.333-338, pp.401-408.
- (8) *Venerabilis Baedae Historia Ecclesiastica Gentis Anglorum*, ed., Ch.Plummer, Oxford, 1956, *Baedae Opera Historica*, ed. and trans. John Edward King, Massachusetts, Harvard University Press, 1930., I-xv. 邦訳：長友栄三郎訳、『イギリス教会史』、創文社、1971年。
- (9) Miller, ed., *op.cit.*, I, 12.

- (10) *ibid.*, pp.12-13.
- (11) *Fabii Ethelwerdi Chronicorum Libri Quatuor*, Bk. 1., in *Monumenta Historica Britannica*, ed. Henry Petri, London, 1848, p.502.
- (12) Chambers, *op. cit.* p.336.
- (13) Leake, *op.cit.*, IV. Getae and Geatas, pp.98-133.
- (14) *ibid.*, p.99.
- (15) *Venerabilis Baedae Historia Ecclesiastica Gentis Anglorum*, ed., Ch.Plummer, IV,16.
- (16) Leake, *op.cit.*, pp.105-106.
- (17) *Willemi Malmesbirensis Monachi De Gestis Regum Anglorum Libri Quinque*, ed. W. Stubbs, the Rolls Series, vol. 90, 2vols.
- (18) Leake, *op.cit.*, p.114.
- (19) 筆者はリークの見解について三回に分けて卑見を述べたことがある。
次の拙稿を参照。「ベアダ『英国民教会史』のアルフレッド古期英語訳
および『ベアオウルフ』におけるGeatasについて——J.A.Leakeの見
解を中心に(1)～(3)」、『異文化の諸相』、第26号(2005年)、第27号
(2006年)、第29号(2009年)、日本英語文化学会。
- (20) 注(1)を参照。
- (21) 筆者は、「『ベアオウルフ』「フィン王の挿話」と『フィンズブルフの
戦』のHengestとジュート——*Klaeber's Beowulf (Fourth Edition)* の見解
を中心に」(『異文化の諸相』、第35号、日本英語文化学会、2014年)で、
そのように指摘したことがある。
- (22) Klaeber, ed., *op.cit.* pp.xlvi-xlvihi.
- (23) *ibid.*, pp. xlviii, ll.26-28.
- (24) Fulk, Bjork, Niles eds., *op.cit.*, pp.lxiv-lxvii.
- (25) 「フィン王の挿話」のエーオタンが、ガウタル説、ジュート説の論争の
解決の糸口になると思われるのであるが、不思議にこれまで、その観点
から論じた論考は、見出されない。『ベアオウルフ』の「フィン王の挿
話」におけるエーオタンとヘンジェストについては、筆者はこれまで何
回か論じて来た。以下の拙稿を参照されたい『『ベアオウルフ』フィン
王の挿話におけるエーオタン』、『異文化の諸相』、日本英語文化学会、
第25号、2004年;「『ベアオウルフ』「フィン王の挿話」におけるHengest

について」、『異文化の諸相』第31号、日本英語文化学会、2011年;
「『ベオウルフ』「フィン王の挿話」におけるHengestについて (2) ——
——R.W.ChambersとJ.R.R.Tolkienの説を中心に」、『異文化の諸相』、第
32号、日本英語文化学会、2012年、等。また、拙稿「古期英語詩『ベ
オウルフ』の成立時期について」、『法政大学キャリアデザイン学部紀
要』、第5号、2009年を参照。

ABSTRACT

The Geatas of *Beowulf*

Michio IWAYA

Beowulf is an anonymous epic written in Old English. The Geatas is an Old English word which means both Beowulf's native country and its people. Beowulf came from the Geatas to the Dene to save them from the catastrophe caused by the monsters.

Since Higelac, the uncle of Beowulf and the king of the Geatas, was proved to be an actual person by Grundtvig, those questions have been sought, that is, who were the Geatas in the real history and where did they inhabit? Two theories have been presented.

One argues that they were the Gautar in Scandinavia and it insists on the phonetic contrast between Geatas and Gautar. The other states that they were the Jutes in Jutland, and it bases its argument on several reasons, one of which is the Geatas found in *The Old English Version of Bede's Ecclesiastical History of the English People*.

This paper aims to resolve the problem. First it traces the history of the controversy of the two theories. It surveys the statements in the original Bede's sentences in Latin, the translation of them in *The Old English Version of Bede's Ecclesiastical History of the English People*, and also the description in *The Anglo-Saxon Chronicle*. Then it examines the views of R.W.Chamber and J. A.Leake, who presented very important achievements about the Geatas in *Beowulf*. Then the views of Fr.Klaeber and the editors of *Klaeber's Beowulf 4th Ed.* are also investigated.

The conclusion is to be stated finally and it depends on the Eotan (the Jutes) in the Finn Episode in *Beowulf*. The nationality of the Geatas will be clarified through the relation between the Eotan (the Jutes) and the Geatas in the story.